

題目： Selective Attention to Contextual Cues in Japan

担当教官： Alan. S. Miller

---

本研究では、日本において、そのコミュニケーション様式の特徴が情報処理システムにどの程度反映されているのだろうかということを検討するために、Stroop 干渉課題を用いて実験が行なわれた。東洋文化圏に生きる人々は、言語内容とは、それがあある特定のコンテクストに置かれ、周囲の状況と関係性に結びつけられることによってはじめて意味を成すものである、という暗黙のルールを共有する傾向にある。よって、日本人は言葉の意味よりも語調に自動的に注意を払うことが予測され、結果も予測を支持した。また、本研究では、日本人が文脈情報に自動的に注意を向けるという傾向が非社会的刺激を用いても示唆されるのかということも、併せて実験された。そのため、「線と枠」課題が使われた。東洋人は西洋人よりも周辺的な情報に注意を払うといわれており、「線と枠」課題で日本人は、周辺的な情報の影響を受けずに呈示された線と同じ長さを正方形の枠内に引くことが求められる絶対判断課題よりも、周囲の情報との関連によって呈示された線を見て正方形の枠内に引くことが求められる相対判断課題のほうが誤差の絶対値が小さいだろうという予測が立てられた。結果は予測を支持し、それにより、Stroop 干渉課題のような社会的刺激を用いた課題だけではなく、「線と枠」課題のような非社会的刺激を用いた実験においても、日本人はその注意を自動的に文脈情報に向ける傾向にあることが示唆された。

また、本研究では、相互独立的か相互協調的かという自己観を測る質問紙調査も併せて行なわれ、その尺度得点と上記の実験で得られた行動指標との間の関連も調べられた。自己について自分自身で概念上の測定を下した結果と、実際の行動が示す結果は一貫しているのだろうか。結果として、質問紙の尺度は、相互独立的か相互協調的かという個人の傾向をある程度正確に測っているという結果を得たが、それらと行動指標との間に有意な相関は見られなかった。また、質問紙の

尺度には今回測定した行動指標への予測力はないという結果が得られた。ここから、人は自分で思っているほど、自分の心の動きをわかっているといえるだろう。

本研究では、予測していなかったが興味深い結果も見られた。質問紙調査において、女性は相互協調的傾向が優勢だったことである。これについては、さらに調査を進めることが望まれる。